

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡

西国分寺地区(旧国鉄中央鉄道学園西側跡地)
住宅市街地整備促進事業に伴う
平成7年度発掘調査概報



1996

西国分寺地区遺跡調査会

はじめに

本調査は、西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）の住宅市街地総合整備事業に伴い、国分寺市からの委託を受け事前調査として平成5年11月から4ヶ年計画で始まりました。今年度は、事業内容の一部変更のため発掘調査の最後の年となりました。8年度以降整理調査に入ります。

今年度の調査は、全調査対象面積6.7haの内、調査地区の北東部と南西部の併せて3.6haという広範囲を対象として実施しました。その結果、試掘調査や前年度までの調査で事前に検出されている「推定東山道武蔵路」の本格的調査による、心々距離12m幅の東西両側溝を持つ道路跡・9m幅の両側溝を持つ道路跡・波板状硬化面を伴う幅7.5mの堀り込み等の検出、中央部に阿玉台式の炉体土器を持つ縄文中期の竪穴住居跡の検出、旧石器時代に属する尖頭器・礫群の検出等々新たな知見を得ることが出来ました。

「推定東山道武蔵路」については、全国でも類を見ないような調査規模・遺構の性格から報道機関を賑わし、現地説明会の実施により研究者をはじめとして一般の方々まで広く関心を持たれるようになりました。結果として関係各位の多大な御理解と御尽力の末全面保存の運びとなりました。今後は歴史の生きた資料として広く皆さんに活用されることを期待します。

本書は、平成7年度の調査概要を示したものです。遺跡全体の詳細については、調査により採取した膨大な資料をひとつひとつ慎重に整理検討して報告書として発表します。西国分寺地区は住宅市街地として整備されますが、保存される「推定東山道武蔵路」や刊行される報告書により武蔵野台地の歴史に新たな一頁が加えられると共に、多くの方々に埋蔵文化財に対する関心と理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大な御理解と御協力をいただきました国分寺市開発二部の方々をはじめ関係各位、地域の方々に厚く御礼申し上げます。また、広大な面積の調査を長期にわたり御指導いただきました坂詰秀一先生をはじめとして、無事発掘調査を終了していただいた調査団の方々に対して感謝の意を表します。

平成8年4月25日

会長 柴崎正次

例 言

1. 本書は、西国分寺地区住宅市街地総合整備事業に伴う平成7年度発掘調査概要報告である。
2. 本調査区は、東京都国分寺市泉町2丁目1番地(旧国鉄中央鉄道学園西側跡地)に所在する。
3. 調査は、国分寺市役所開発二部、東京都住宅局、東京都住宅供給公社、住宅・都市整備公園の委託を受け、西国分寺地区遺跡調査会が実施した。
4. 本書の編集・執筆は、坂詰秀一団長の指導のもとに、持田友宏副団長・早川泉参与の助言を得て、板野晋鏡・伊藤俊治・小林定之が行った。尚、執筆者名は文末に記した。
5. 本書の挿図・図版の作成は、田口直美・司東順香・中野宏子が行った。
6. 本書の内容は、平成8年3月31日に於ける整理段階のものであり、遺構・遺物は、主だったものを選出して掲載している。
7. 発掘調査および本書の作成にあたって、下記の方々や諸機関より御指導・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。

木下良・小林重義・近藤滋・有吉重藏・福田信夫・上敷領久・河内公夫・西野善勝
川島雅人・岩橋陽一・武笠多恵子・松田隆夫・藤原佳代・杉浦由恵・小川将之
東京都教育委員会・国分寺市教育委員会・東京都埋蔵文化財センター・国分寺市遺跡調査会
都立府中病院内遺跡調査会・都営川越道住宅遺跡調査会・武蔵国分寺関連遺跡調査会
加藤重機建設㈱・㈱こうそく・㈱富士金物

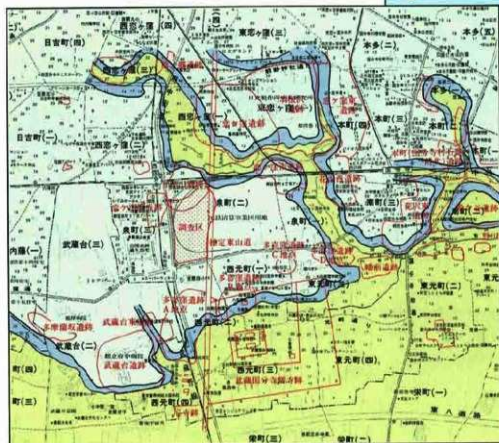
目 次

はじめに	表紙 2
例言・目次	
I. 調査の概要	2
II. 旧石器時代の調査	4
III. 縄文時代の調査	8
IV. 歴史時代の調査	20
V. 総括	31
西国分寺地区遺跡調査会組織名簿	32
報告書抄録	表紙 3

I. 調査概要

遺跡の位置と環境 本調査区は、JR中央線西国分寺駅の南東方向に占地している旧国鉄中央鉄道学園跡地の西側部分に位置している。多摩川左岸に広がる武蔵野段丘面上に立地しており、標高は約79mである。北には野川の開折谷で武蔵野段丘に深く刻まれた恋ヶ窪谷、南方には下位段丘である立川段丘との比高差約12mの国分寺崖線を控えている。南東崖線下には、南北1.5km、東西2kmの広がりを持つ国指定史跡「武蔵国分寺跡」が在り、当該地区は、その北西地区の一面をなしている。また、恋ヶ窪谷の南斜面には縄文中期の日影山遺跡が在り、調査区北端は一部日影山遺跡と重複している。

恋ヶ窪谷や国分寺崖線下には数多くの湧水が在り、遺跡周辺は野川の源流域となっている。この野川源流域には、段丘の発達と崖線下の湧水地という地理的条件から、旧石器・縄文時代の遺跡群と古代律令期以降の遺跡群に集約できる著名な遺跡が数多く分布している。旧石器時代の遺跡群では、多摩崗坂遺跡、熊ノ郷遺跡、武蔵台遺跡等。縄文時代の遺跡では、重要文



凡 例

- = 武蔵野段丘面
- = 立川段丘面
- = 国分寺崖線

調査位置と周辺の遺跡

化財指定の勝坂式土器で著名な多喜窪遺跡、恋ヶ窪遺跡、恋ヶ窪南遺跡、武蔵台遺跡、武蔵台東遺跡等がある。古代律令期においては、崖線沿いに建立された武蔵国分僧寺・尼寺跡、その周辺に広がる寺の建立・維持に関わった人々の集落跡等が広範に分布し、特に僧寺・尼寺の中央には、本調査区でも検出されている両側溝を伴う幅12mの直線道路・推定東山道武蔵路が南北に通過している。また、南約4kmの位置(府中市大國魂神社付近)には、武蔵国庁推定地があり、国分二寺との一体化の中で遺跡周辺域は、古代武蔵国の生活・文化の中心地であった。



▲ 武蔵国分僧寺跡

調査区分 本調査は、西国分寺地区住宅市街地総合整備事業に伴う事前調査として、平成5年11月から平成8年10月までの4ヶ年計画で開始された。調査区分は下図に示すとおり、調査対象地区全体を4地区に区分し年度毎に順次調査する事とした。

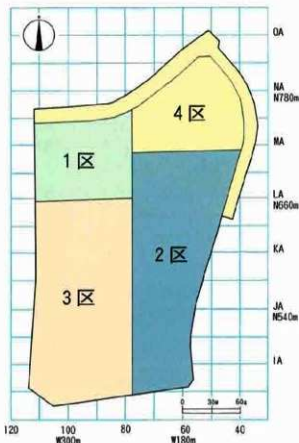
今年度の調査は、3区(22,520.64㎡)を対象に実施する予定であったが途中事業計画に一部変更があり調査期間が短縮されたため、次年度調査予定の4区(13,429.64㎡)も同時に調査することとなった。3区・4区の調査面積の合計は、35,950.28㎡である。

調査方法

1. 各調査区を便宜上、次のように小地区に区分し調査する事とした。

- 3区 = A区(南東部)・B区(南西部)
 C区(北東部)・D区(北西部)
- 4区 = A区(東部)・B区(中央部)
 C区(西部)

2. 調査グリッドは、当該地区が『武蔵国分寺跡』の北西地区にあたる事から、国分寺市遺跡調査会で設定した僧寺中軸線中心点を座標原点とする、最小単位が3×3mのグリッドを使用している。方位は、南北中軸線に対し真北が7°08'03"、磁北が0°38'03"それぞれ東偏する。
 (板野晋鏡)



調査区分図

凡例 1区 2区 3区 4区

II. 旧石器時代の調査

3区の調査 調査区内に9×9mの調査坑を15ヶ所設定し11月30日調査区南東部に設定した調査坑より掘削を開始した。当調査区の遺物分布状況を南北にわたり確認し、2月29日調査を終了した。最終調査箇所は3×3m1箇所、9×9m6箇所の合計7箇所調査面積は495㎡、3区全体面積の約2%である。

調査結果 鉄道学園西側跡地における旧石器時代の遺物分布は北東地区を中心に広がることが前年度までの調査で確認されてきたが、中央部から南側にかけては数点確認されている程度であった。

今年度の調査では調査区中央西側の位置で尖頭器がIII層から出土、南東の位置で礫集中地点がIII層から出土、中央やや西寄りの位置で礫・剥片の集中地点がIII層下面から出土している。遺物は石器・剥片を含めて計70点出土した。

4区の調査 調査区内に9×9mの調査坑を29箇所設定し遺物・遺構が検出された場合は随時拡張する方法を採り1月8日C区の調査坑から調査を開始した。B区北東に設定した調査坑から石器・剥片を含む礫群が多量に検出されたため出土地点を中心に拡張して平面掘削を行った。最終調査面積は合計6,147㎡で4区全体面積の約46%にあたり、3月29日をもって全ての調査を終了した。

調査結果 4区における遺物の分布は試掘調査・前年度の調査結果を考慮すると全調査区の中でも極めて高い可能性があると推測された。今年度の調査では鉄道学園グランド跡北東部から北西部にかけて石器・剥片を含む礫の集中地点が10数箇所IV層中面において検出された。また、最北部に設定した調査坑ではグリーンタフの剥片がX層上面より出土している。(小林定之)



▲ 調査風景



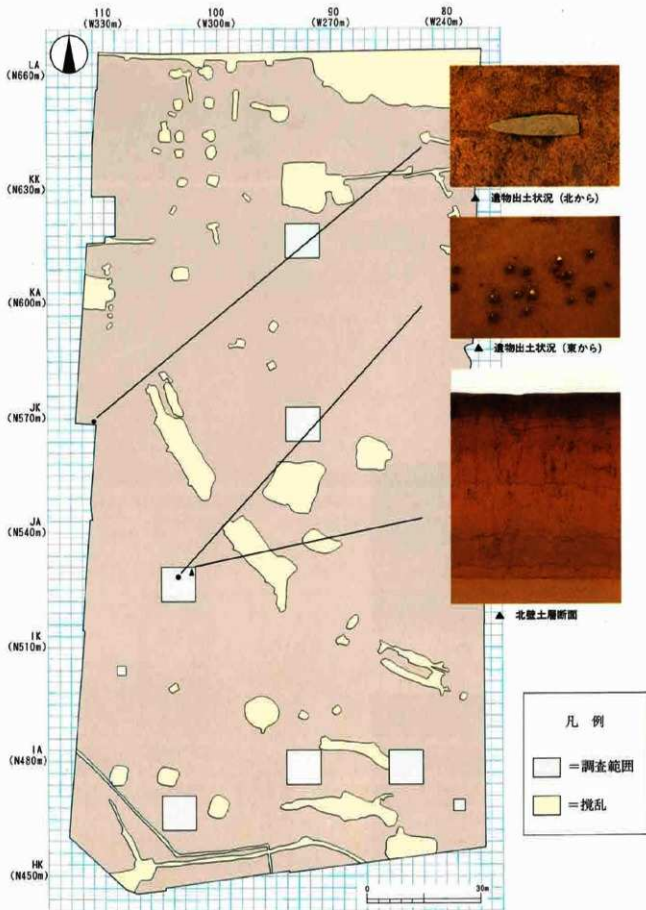
▲ 調査風景



▲ 遺物出土状況(北から)



▲ 遺物出土状況(西から)



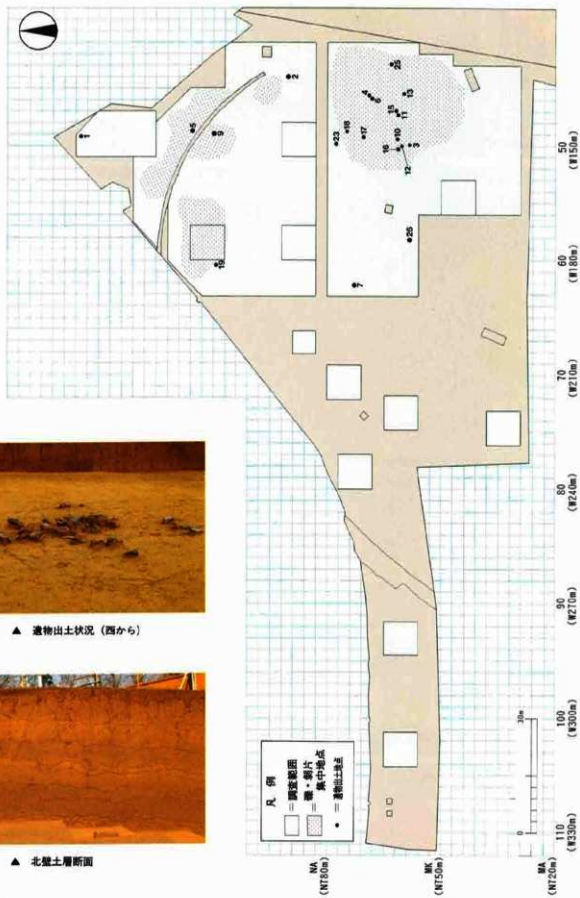
3区旧石器時代調査範囲図



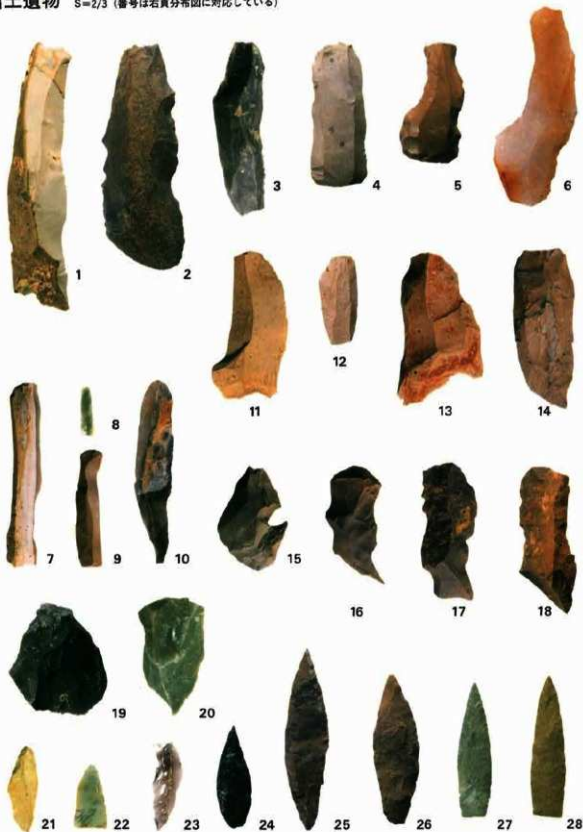
▲ 遺物出土状況 (西から)



▲ 土層断面



出土遺物 S=2/3 (番号は右頁分布図に対応している)



III. 縄文時代の調査

3区の調査 縄文時代の調査は、5月31日歴史時代の調査を終了したA区から包含層の掘削を始め、終了したところから随時遺構検出・調査を行い、B区・C区・D区と調査を進めた。1月25日最後の遺構完掘状態の空中写真撮影を行い、2月20日当該期の調査工程を終了した。

調査結果 今年度の調査で検出された遺構は、集石6基・土坑20基（内陥し穴5基）・特殊遺構1基・小穴205個である。集石は調査区西側を南北に点在している。土坑も北東隅で検出された陥し穴を除くと中央より西側に点在している。遺物は、土器片・石器等約10,000点が出土している。



▲ 調査風景



▲ SS-8J 確認面・曝出土状況（南から）



▲ SS-8J 土坑曝出土状況（北から）



▲ SS-8J 土層断面（北から）



▲ SS-8J 調査風景

SS-8J

本遺構は、調査区中央西側 IO-108-110・IQ-108-110グリッドに位置する。II層中面において検出され、上面は耕作により削平を受けていた。

最初の確認面では6×6m四方にわたり1～3cmの破砕礫が散乱しており、その下の確認面で礫分布の中心部に土坑の平面プランが検出された。土坑の形状は、直径1m、確認面からの深さ0.5mを測るすりばち型を呈する。土坑内の構成は3層に分かれ、確認面から30cmまでは、一部赤化した5～10cm大の破砕礫で充填されていた。その下10cmは炭化物を含む暗褐色土が主体となる自然堆積層である。最下層は焼土を含む褐色土主体でこの層直上の面に10cm大の炭化物が3点出土している。

SK-177J

本遺構は、調査区南側中央部 HS-93~94グリッドに位置する。Ⅲ層上面において検出され、北側の一部は攪乱を受けている。

形状は、長軸を南北方向にもち長軸2.3m、短軸1.35m、確認面からの深さ1mを測る。やや丸みのある長方形を呈する。東・西壁はややオーバーハングしながら掘り込まれている。底面はほぼ平坦で直径2~6cm、深さ20cmを測る小穴が7個検出された。覆土は暗褐色土が主体の自然堆積層である。最下層は炭化物を含み黒色に近い色調で平坦に堆積している。規模・形状より陥し穴と思われる。



▲ SK-177J完掘状態 (西から)



▲ SS-177Jピット検出状態 (西から)



▲ SK-179J完掘状態 (南から)

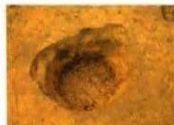


▲ SK-179Jピット検出状態(南から)

SK-179J

本遺構は、調査区南西 IL-101~102グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出され、遺存状態は良好である。

形状は長軸を東西方向に持ち、長軸2.1m、短軸1.4m、確認面からの深さ0.6mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる壁面を持つ長方形を呈する。底面はほぼ平坦で、断ち割り調査により直径15cm、深さ45cmを測る小穴が長軸方向中軸に3個並んで検出された。土坑覆土は暗褐色土主体の自然堆積層で、小穴覆土は褐色ローム土を主体とし中心部は色調が暗い。本遺構も規模・形状等により陥し穴と推測される。



▲ SK-358J完掘状態 (東から)



▲ SK-358J土層断面 (東から)

SK-358J

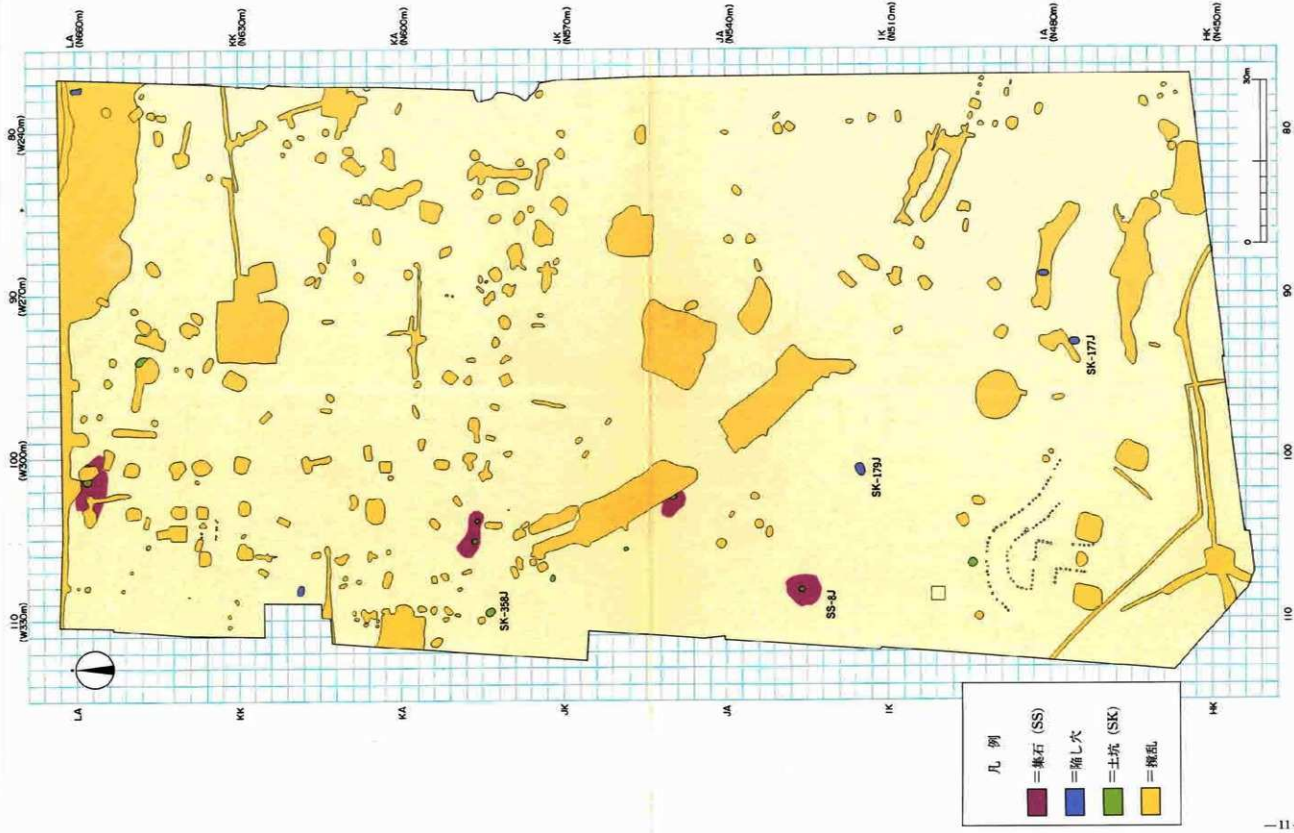
本遺構は、調査区中央西側 JO-110グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出され、遺存状態は良好である。

形状は南北方向に長軸を持つ長軸1.8m、短軸1.5m 確認面からの深さ0.8mを測る不整形の楕円である。壁は底部から0.6mまではほぼ垂直で上面までは緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で直径1mの円形である。覆土は大きく3層に分かれ、壁面近くは崩落と思われるローム土の流れ込みが観察され、中心部分は暗褐色土を主体とする単層にちかい堆積をしている。

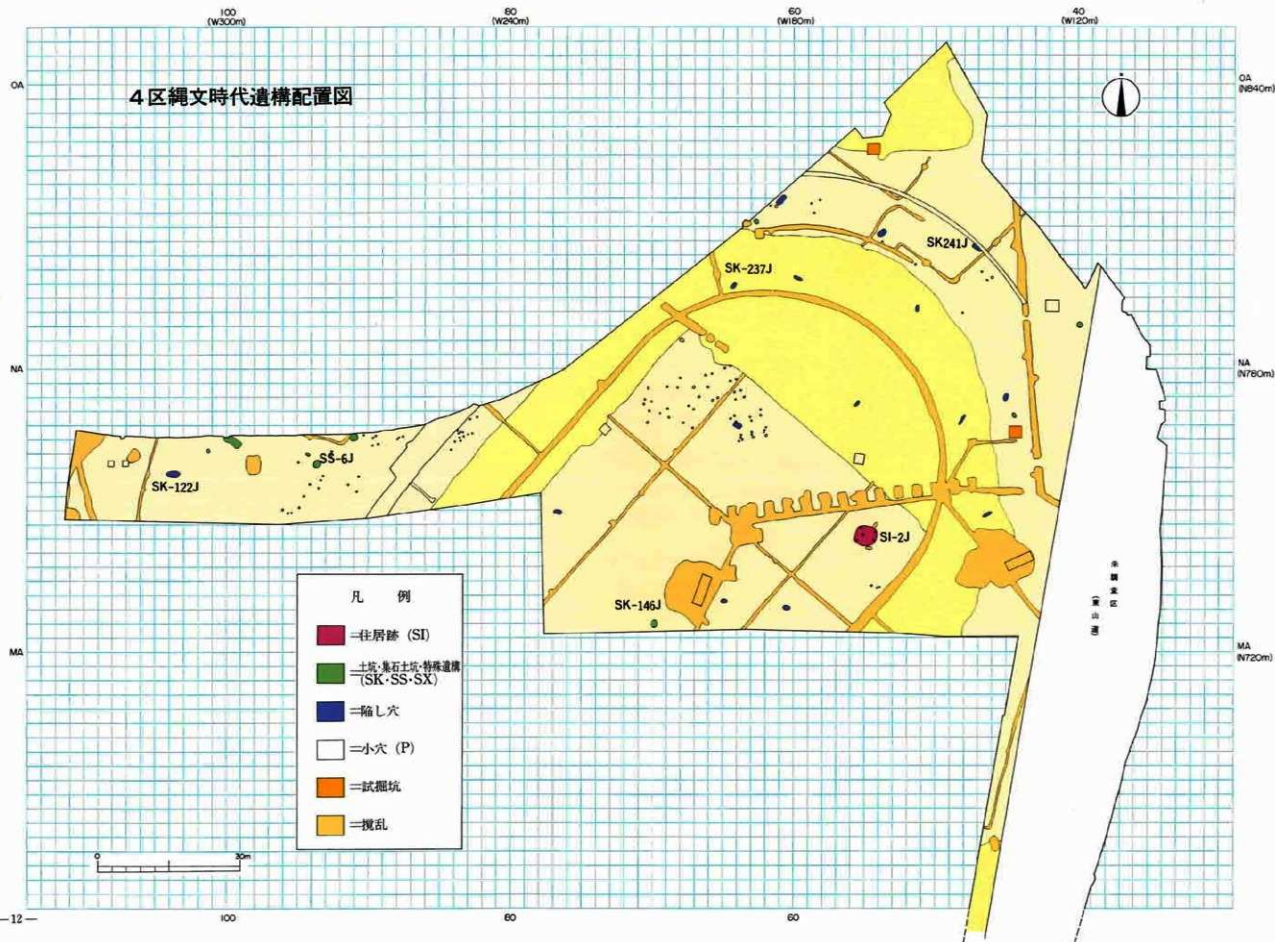
(小林)



3区 縄文時代遺構発掘状態全景



4区縄文時代遺構配置図





4区 縄文時代遺構完備状態全景

4区の調査

4区縄文時代の調査は、5月31日歴史時代の調査の終了したC区から包含層の掘削作業を開始し、終わった所から随時遺構の検出・調査を行い、2月7日SI-2Jの調査終了をもってすべての工程を終了した。

調査結果 確認された遺構は竪穴住居跡1軒・特殊遺構3基土坑85基（内陥し穴15基）・集石遺構2基・小穴221個である。B区中央部南寄りに検出されたSI-2Jは阿玉台式の埋甕炉をもち縄文中期の住居跡と思われる。また陥し穴は調査区全体に満遍なく分布していた。小穴は中央部に集中的に検出された。掘立柱建物跡等の重複が考えられるが、上面の削平が大きいため判別が難しく、また配列に数通りの可能性が考えられるので現段階ではピット群とするに止めた。

遺物は土器片・石器片等約30,000点が出土した。



▲ 調査風景



▲ 調査風景



▲ SI-2J 完掘状態（東から）



▲ SI-2J 土層断面（南から）

SI-2J

本住居跡は、B区中央部南東寄りのMH-55・56グリッドに位置する。Ⅲ層上面まではグランド造成工事により削り取られており、上部の遺存状態は良くない。

形状は径約4.5mのほぼ円形で確認面から床面までの深さは最大でも8cm程である。壁は東側が一部削平されているが残存部分は緩やかに立ち上がっている。床面は南側がやや低い他は全体的に平坦で、中心よりやや西側部分に炉が構築されている。炉の周囲には東側に広く分布した状態で硬化面が確認された。炉は東西が長軸の楕円形をした埋甕炉で長軸90cm短軸65cmの規模を有し、火床までの深さは10cmを測る。埋甕は炉の西部分に上部が火床から6cm程でた状態で埋設されており、その周囲には焼土が多く残っていた。形状は径18cm高さ19cmの筒型で底部は欠けている。柱穴は壁際に4本ほぼ対をなした状態で検出され、径30～60cm深さ45～70cm程の規模を有する。覆土は暗褐色土主体の単層で床面下には褐色

土が4cm程張られていた。掘り方面からは各柱穴の内側20cm程の所にそれぞれ柱穴が検出された。これら柱穴は地山と同じローム土で埋め戻されており非常に検出しづらかったが、規模は使用時のものとはほぼ同じで径30~40cm 深さは60~85cm程ある。また炉も東側が一部重複する状態で同様の窪みが確認された。これらのことから本住居跡は後に一回り大きく建て替えられたものと思われる。遺物は埋甕の他に土器片が31点、黒曜石の石鏃2点の他黒曜石片が数点出土した。土器は埋甕も含め阿玉台式土器であり、これより本住居跡は縄文時代中期初頭に構築されたものと推測される。



▲ 炉・完備状態 (南から)



▲ 炉・掘り方土層断面 (南から)

SS-6J

本集石は調査区西側MN-94グリッドに位置し、II層上面において検出された。

礫は径4.5mの円形状に分布するが密集部は径1.5m程で深さ40cmまですり鉢状に掘り込まれている。掘り込み内にも多くの礫が残っており、底部からは径10cm程の炭化物も出土した。礫の総数は約2,300個に及ぶが大半は拳大の破碎礫で赤化したものも多い。土器片も阿玉台式を中心に約50点出土した。



▲ SS-6J 出土状況 (南から)

SK-237J

本土坑は調査区北壁近くのNT-65グリッドに位置する。上部をグラウンド造成工事により削り取られているためIV層上面において検出された。

形状は東西に長軸をもつ長方形を呈し、規模は長軸1.5m 短軸0.7mで確認面からの深さは0.3mを測る。壁は全面とも垂直に立ち上がっている。底面は平坦で計7本のビットが検出された。ビットはすべて断ち割って調査したが、底面中央部長軸方向に3本並んで検出されたビットは規模が大きく底面での径は10~15cmで深さも58~66cm程ある。覆土は大きく4層に分かれ、最下層に薄く褐色土が堆積している他は暗褐色土を主体とした土が均等に堆積している。

本土坑はビットの規模が気になるが陥し穴であると思われる。



▲ SK-237J 完備状態 (南から)



▲ SK-237J ビット検出断面 (南から)

SK-122J

本土坑は、調査区西側 MM-104グリッドに位置する。遺存状態が良く、Ⅲ層上面において検出された。

平面形は長軸2.6m 短軸1.2mの東西に長軸をもつ楕円形で確認面からの深さは約1.1mを測る。南北壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、東西壁は確認面から20cm程下からは大きくオーバーハンクしている。底面は長楕円形で長軸は3.3mと平面形より長い短軸は10~20cm程しかなく半截時より断ち割って調査した。覆土は下層には褐色土が多いが暗褐色土が主体で平坦に堆積している。本土坑は規模・形状からして所謂Tピットと称される陥し穴であると思われる。



▲ SK-122J土層断面 (南から)



▲ SK-122J半截完掘状態 (南から)



▲ SK-241J土層断面 (南から)



▲ SK-241J半截完掘状態 (南から)

SK-241J

本土坑は調査区北側 NI-47・48グリッドに位置する。遺存状態が良くⅢ層上面において検出された。

平面形は長軸2.3m 短軸0.6mの東西に長軸をもつ長楕円形で、確認面からの深さは45cmを測る。南北壁は傾斜した立ち上がりだが東西壁は垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦で形状は長方形に近い。覆土は大きく4層に分かれ、最下層が褐色土の他は暗褐色土が主体でやや中央部が盛り上がった状態で堆積している。西側上層には流れ込みと思われるが径30cm程の礫が混入していた。

本土坑も陥し穴であると思われる。

SK-146J

本土坑は調査区南側の MB-70グリッドに位置し、Ⅱ層中段において検出された。

南側一部が削平されているが残存部平面形は径約1.8mのほぼ円形で確認面からの深さは50cmを測る。壁は全面とも傾斜して立ち上がっている。底面も平坦な円形で径は1.4mを測る。覆土は4層に分かれるが上層の暗褐色土が深さ40cm位まで堆積しておりこれが覆土の大半を占める。遺物は底面近くで土器片が2点出土したが小片であり時期や形式は確認できなかった。

本土坑の性格は不明だがサンプルを採取したのでこの分析結果を待ちたい。

(伊藤俊治)

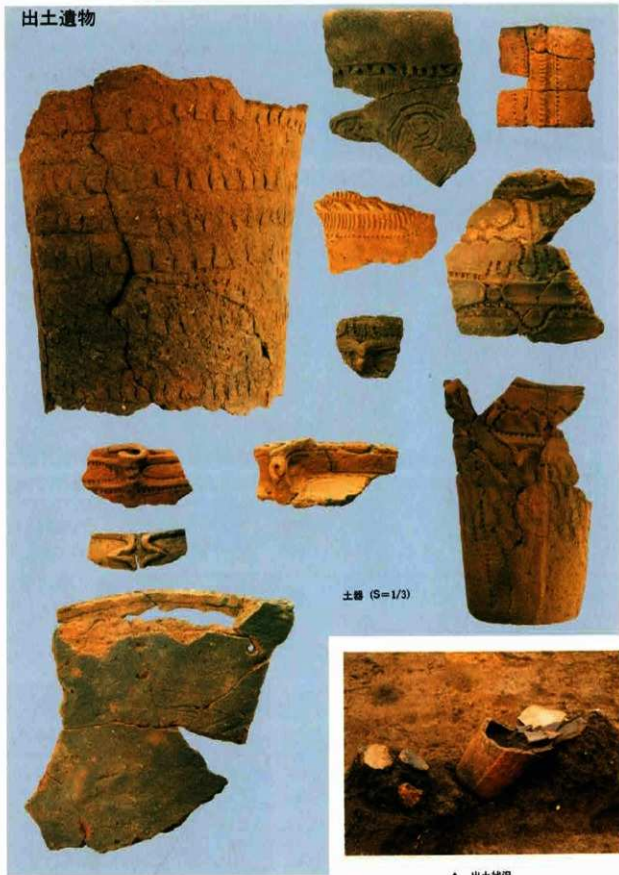


▲ SK-146J土層断面 (南から)



▲ SK-146J完掘状態 (南から)

出土遺物



土器 (S=1/3)



▲ 出土状況



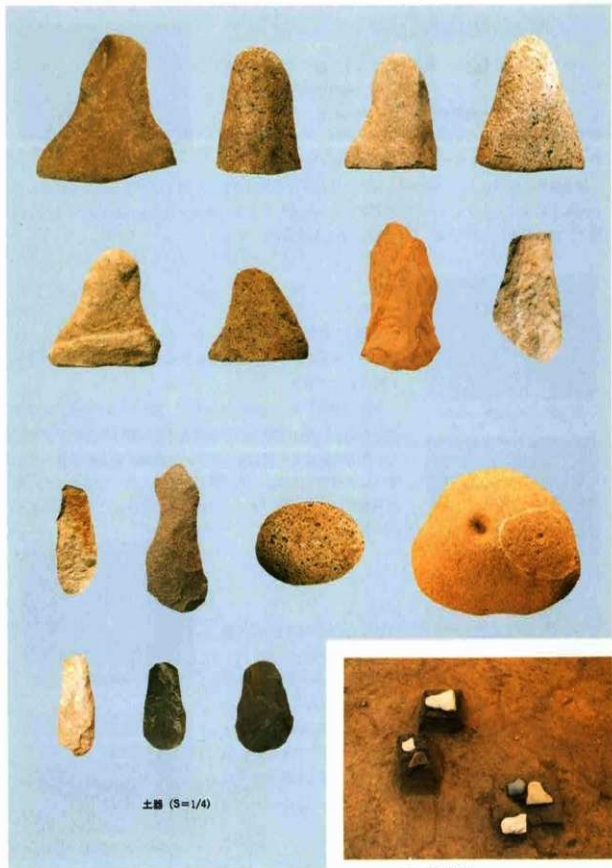
土器 (S=1/3)



尖頭器・石鏃 (S=1/1)



▲ 出土状況



土器 (S=1/4)

▲ 出土状況

IV. 歴史時代の調査

3区の調査 歴史時代の調査は、4月5日前年度表土掘削の終了したA区から、養生のための藁芝の除去を始め終了したところから遺構検出・調査を開始した。順次B区・C区・D区と調査を進行させ11月15日D区の遺構完掘状態の空中写真撮影を行い、11月21日をもって3区歴史時代の調査工程を終了した。

調査結果 今年度3区の調査は、鉄道学園当時の施設跡や太平洋戦争時と思われる施設跡による攪乱を広範囲で受けているが、全調査区から比べると遺存状況は良好であった。検出された遺構は、溝跡8条、土坑275基、特殊遺構23基、小穴349個である。



▲ 調査風景



▲ SK-27完掘状態 (南から)



▲ SK-27土層断面 (南から)

SK-27

本遺構は、調査区中央南側 IF-86~87グリッドに位置する。II層上面で検出され、上面東側半分を削平されている以外の遺存状態は良好である。

形状は長軸を東西方向に持ち長軸1.75m、短軸1.15m、確認面からの深さ0.25mを測る長方形を呈する。壁は東西がやや傾斜し、南北がほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦な長方形である。覆土は黒褐色を主体とする自然堆積層で大きく単層ととらえられ下部にはローム粒・ブロック状の土が堆積している。締まりやや強く粘性は弱い。

SK-81

本遺構は、調査区中央南側 HT-97グリッドに位置する。II層上面において検出され、遺存状態は良好である。

形状は南北に長軸方向を持ち長軸1.35m、短軸0.75m、確認面からの深さ0.45mを測る長方形を呈する。壁は南北がやや傾斜し東西が垂直に立ち上がる。底面は平坦で長軸1.15m、短軸0.6mを測る長方形である。覆土は黒褐色土を主体とする3層に分けられ最下層ではローム土が混じる。締まり弱く粘性はやや弱い。



▲ SK-81完掘状態 (東から)



▲ SK-81土層断面 (東から)

SK-222

本遺構は、調査区中央北側 JQ-93グリッドに位置する。II層上面において検出され、遺存状態は良好である。

形状は直径1m、確認面からの深さ0.25mを測る円形状の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で円形をしている。覆土は単層で灰褐色土・暗褐色土・黒褐色土の混合土が主体で、粘性・締まりともに弱い。上部は粒の細かい土で下部はブロック状の土が堆積している。



▲ SK-222完掘状態 (東から)



▲ SK-222土層断面 (東から)



▲ SK-227完掘状態 (東から)



▲ SK-227土層断面 (東から)

SK-227

本遺構は、調査区中央北側 KF-94グリッドに位置する。II層上面において検出され、遺存状態は良好である。

形状は直径0.9m、確認面からの深さ0.25mを測る円形状の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で円形をしている。覆土は単層で灰褐色土・暗褐色土・黒褐色土の混合土が主体で、粘性・締まりともに弱い。覆土・断面・形状等SK-222に類似しており周辺にも同型の土坑が数基検出されている。

SK-320

本遺構は、調査区中央北側 KI-95~96グリッドに位置する。II層上面において検出され、遺存状態は良好である。

形状は南北に長軸方向を持ち長軸1.8m、短軸1.05m、確認面からの深さ0.4mを測る長方形を呈する。壁は南北が傾斜し東西が垂直に立ち上がる。底面は平坦で長軸1.15m、短軸0.6mを測る長方形である。覆土は3層に分けられ黒褐色土・暗褐色土・ロームブロックの混合土が主体で色調が下層に移るにつれて暗くなる。粘性・締まりともに弱い。(小林)



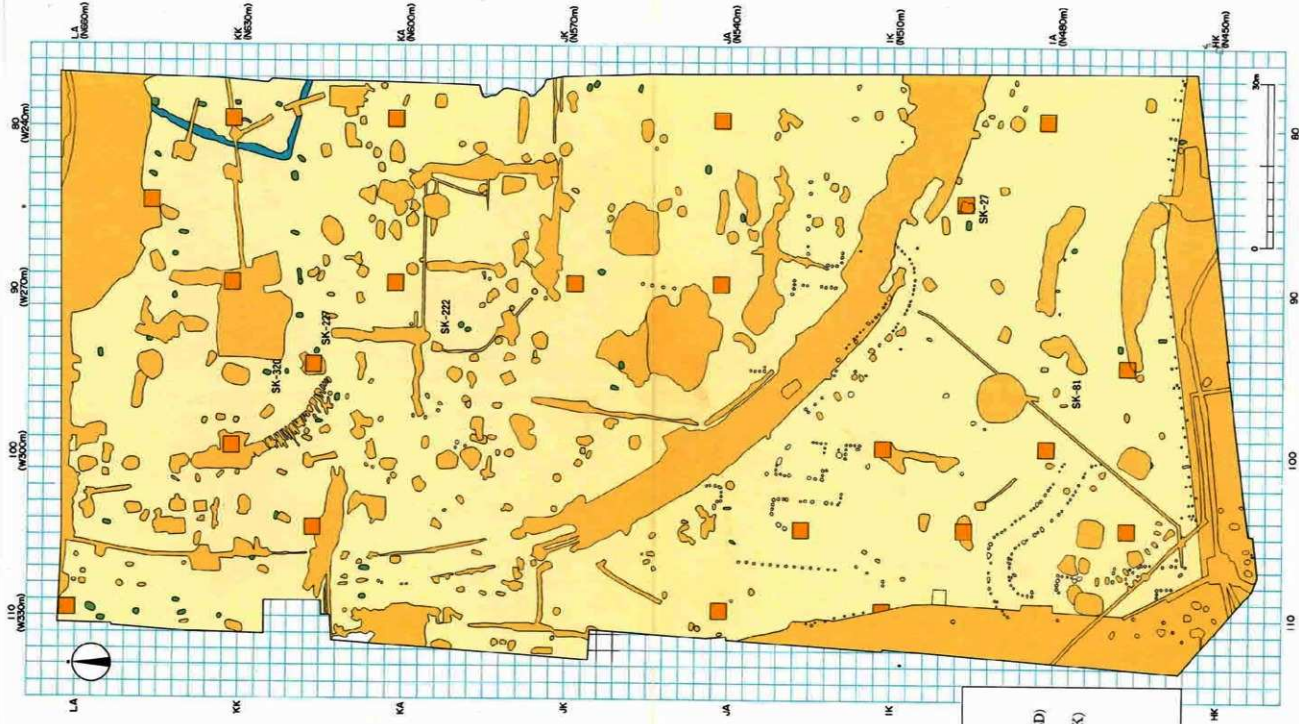
▲ SK-320完掘状態 (西から)



▲ SK-320土層断面 (西から)

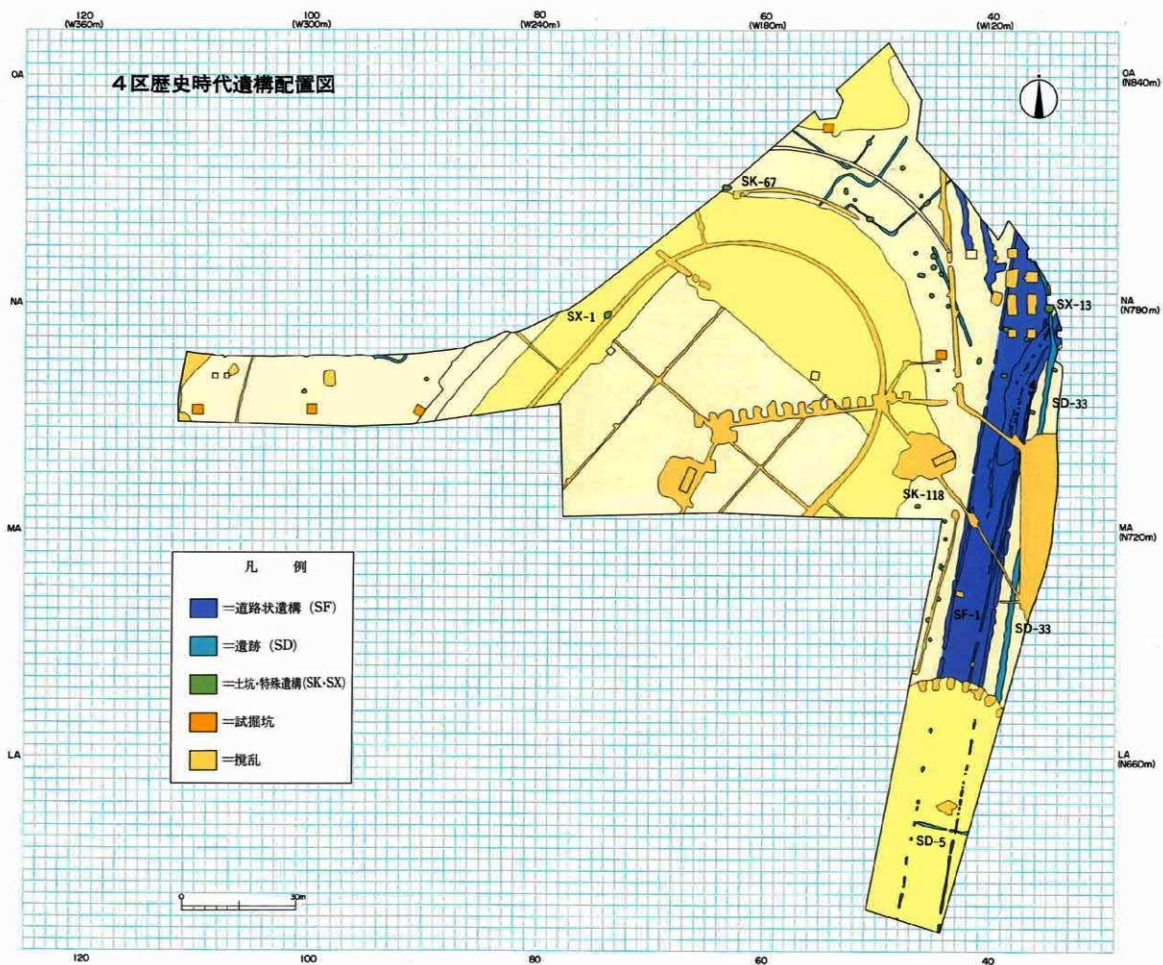


3区 歴史時代遺構完備状態全景



凡例

- = 溝跡 (SD)
- = 土坑 (SK)
- = 溝亂
- = 試掘坑





4区 歴史時代遺構発掘状態全景

4区の調査

4区歴史時代調査は、4月19日重機による表土掘削を開始し、終了した西側から順次遺構の検出・調査を行い、10月7日東山道以外の地区は調査を終了した。

調査結果 確認された遺構は道路状遺構3本・溝跡23条・土坑188基・特殊遺構7基・小穴369個である。SF-1は、本年度調査で12m幅の両側溝が南側埋文センター調査区南端から本調査区北壁まで約340m検出された。SD-33はSF-1東側に並んで検出された溝跡だが北壁際では交差しているのが確認された。



▲ 調査風景



▲ 調査風景



▲ SD-33完掘状態（南から）

SD-33

本溝跡は調査区東壁際のLE-39からND-37グリッドにかけて南北に走っている。南側と中央部は撓乱により大きく削平されている。北側は東山道切り通し状遺構及びSX-13と重複し、これらを壊して構築されている。南端からMP-35グリッド位までは直線的に伸びるが東山道切り通し状遺構と交差するあたりからは緩やかに西へカーブする。溝幅は1.5m程だが全長は中央撓乱部分もふくめて測れば約120mに及ぶ。底面は所々凹凸があるものの全体としては平坦で幅は平均80cm程ある。覆土は黒褐色土主体で自然埋没と思われる。

SX-13

本遺構は、調査区東壁際東山道切り通し状遺構脇のMT-35・36グリッドに位置する。北側は撓乱により、また中央部はSD-33により底面近くまで削平されている。

形状はやや歪んだ台形を呈し、規模は長軸2m短軸1.4~1.8mで深さは90cmを測る。壁は底面から40cm位までは垂直に近い立ち上がりだが、それより上は緩やかに傾斜している。底面は平坦で南西壁下には周溝状の窪みが、また北壁下には土坑状の掘り込みが確認できた。覆土は黒褐色土が主体だがSD-33に大きく削り取られており堆積状態は確認しづらかった。遺物は底面近くから10世紀中頃のものと思われる須恵器の高台碗と坏が出土した。



▲ SX-13遺物出土状況（北から）



▲ SX-13完掘状態（西から）

SX-1

本遺構は調査区北壁近くのMS-74グリッドに位置する。上部はIV層上面まで削り取られており、また南側1/4は更に1m程深く削平されている。

平面形は径1.8mの円形だが、確認面から90cm程下では一辺が約80cm、底面では約30cmのやや歪んだ正方形を呈し、深さは1.7mを測る。壁は全面とも底面から45度位の傾斜で立ち上がっている。また底面から80cm位までの壁面には工具痕と思われる深い筋状の溝が多数確認された。覆土は黒褐色土を主体に11層に分かれるが堆積状態から自然埋没と思われる。



▲ SX-1土層断面 (南から)



▲ SX-1完備状態 (南から)



▲ SK-118土層断面 (南から)



▲ SK-118完備状態 (南から)

SK-118

本土坑は調査区南東寄りのMC-46グリッドに位置し、II層上面において検出された。

南側1/4程が削平されているが残存部平面形は径約1.4mの円形で確認面からの深さは30cmを測る。壁は西側はやや傾斜した立ち上がりだが東側及び北側はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は所々凹凸があるものの全体としては平坦で径1.2mの円形を呈する。覆土は黒褐色土が主体だが細かなロームブロックが多く混入している。

本土坑の性格は不明だが2区調査でも東山道沿いに同様の土坑が検出されており、これとの関連性を確かめたい。

SK-67

本土坑は調査区北壁際のNK-64グリッドに位置する。II層上面において検出されたが、北西隅は攪乱により削平されている。

形状は東西に長軸をもつ長方形を呈し、規模は長軸1.8m短軸1.2mで確認面からの深さは60cmを測る。壁は全面とも垂直に立ち上がっている。底面は全体としては平坦だが南壁近くに径60cm深さ20cm程の不整形な窪みがある。覆土は黒褐色土主体だがロームブロックが多く混入している。

本土坑の性格も不明だがサンプルを採取したのでこの分析結果を待ちたい。
(伊藤)



▲ SK-67土層断面 (南から)



▲ SK-67完備状態 (南から)

SF-1 (推定東山道武蔵路)

SF-1は4区東端を南北に通過しており、検出された東山道跡に関わる遺構は、溝跡4条(SD-29・30・31・32)と硬化面を伴う切り通し状の掘込み遺構1基である。溝跡は、その形状・規模・覆土の堆積状態等が酷似していることからそれぞれ対応関係にあり、道路の東西両側溝であると推定される。切り通し状遺構は、道路跡の最北部で検出され、路面中央部から東方向に大きく逸れながら東側溝を壊し、北東の谷に向かって切り通し状に掘り込まれ構築されている。

道路跡は、各遺構の新旧関係から推察すると次の様に最低4時期の変遷が想定される。

第1時期目は、心々距離12m幅の東西両側溝(SD-31・32)を伴う構築時の東山道と推定される道路跡である。両側溝は12mの幅を保ちほぼ一直線に検出されており、総距離は南側埋文センター調査区から本調査区の北端まで約340mを測る。両側溝は溝とはいっても底は繋がっていない。途中所々掘り残された様に分断され、長土坑が連続する状態の部分もあった。また、溝壁や溝肩は崩れが少なくオーバーハングした部分も崩落していないことから、溝は比較的短期間で埋没したと思われる。路面の中央部は鍋底状に窪んでおりやや硬化した範囲も認められた。

第2時期目は、両側溝の上層で検出された硬化面で、南側埋文センター調査区でも同様の踏み固められたと思われる黄褐色粘質土主体の硬化面が検出されていることから、側溝が埋没した後で使用された道路跡と思われる。

第3時期目は、12m幅の道路の上に重複して構築された心々距離9m幅の東西両側溝(SD-29・30)を伴う道路跡である。西側溝は旧道路の西側溝とほぼ同じ位置を重複して掘っており、東側溝は西側溝から9mの位置に旧路面を壊して平行に掘られている。調査区南側は鉄道学園の野球場跡で削平されているが南側埋文センター調査区でも同様の規模と位置関係を持つ2条の溝跡が検出されており、本調査区で検出された溝跡と繋がるものと推定される。両側溝は北に向かうにつれ徐々に東に振れていき、溝の心々距離も次第に広くなってゆく。西溝は途中途切れ以北では検出されていない。

第4時期目は、道路北部で検出された切り通し状に掘り込まれた道路跡である。路面は旧道路の東寄り位置から北東に向かって徐々に掘り込まれ、大きく東に逸れながら東側溝(SD-30・32)を壊し皿状に深く掘り込まれている。遺構の幅は7.5m、確認面からの深さは1mを測る。道路面には踏み跡と思われる幅50cm程の2条の硬化面が蛇行しながら掘込みに向かって検出されており、硬化面は掘込み部では幅1.8mの波板状の硬化面となっている。また、掘込みの肩部でも



▲ 発掘全景 (北から)

幅50cm程の硬化面が数枚検出されており、
切り通し状の路面が埋没する過程の中で
長期間に渡って道路として使用されたも
のと思われる。 (板野)



▲ 第1時期目・12m幅道路全景(南から)



▲ 第2時期目・側溝上硬化面(北から)



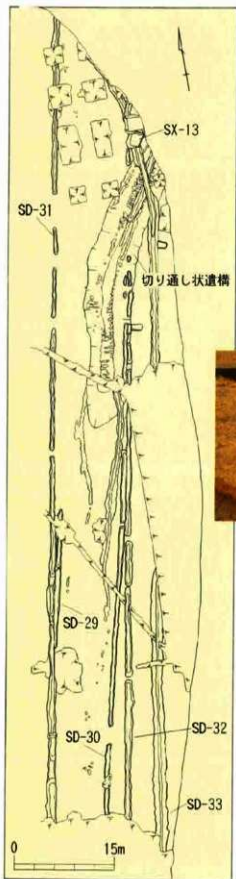
▲ 完結全景(空中写真)



▲ 第3時期目・9m幅道路全景(南から)



▲ 第4時期目・切り通し状遺構(南から)



▲ 切り通し状遺構
SX-13・SD-33全景
(空中写真)



◀ 波板状硬化面検出
(南から)



▲ 土層断面 (SD-31-29)



▲ 土層断面 (SD-30-32)

V. 総括

平成5年11月に着手された発掘調査は、平成8年3月をもって現地調査を終了した。当初計画より諸般の事情のため、7ヶ月の短縮くりあげ終了となったが、あたえられた範囲の調査は、ほぼ完了することができた。

平成7年度の発掘は、3・4区の35,950.28㎡であった。1・2区と同様、上面は、すでに削平されていたが、上層に古代の道路跡、その下に縄文時代及び旧石器時代の遺構と遺物が存在することが推定されていた。発掘の結果、予想された時代の遺物が検出され、また、遺構も発掘された。

4区には、すでに国分寺市教育委員会の試掘結果によって、推定東山道武蔵路と考えられる古代の道路跡の存在が確認されていた。この道路跡は、側溝をもつ幅員12mのもので、南方の斜面をくだった国分僧寺と尼寺の間を通して国府域にいたり、また、北方、埼玉県所沢市の東の上遺跡、群馬県境町の矢の原・牛堀遺跡で発掘されている道路跡に連なるものであろう、と推定されるものであった。発掘の結果、予想以上に良好な状態で遺存していることが判明した。

発掘された道路跡は、幅員12m乃至9mのもので、ともに側溝の存在によって明瞭であり、硬化面も見い出された。延長340mに及ぶ道路跡は、ほぼ南北に一直線に築造されていた。側溝は、340mすべてにわたって両側に検出されたが、それは溝として連らなって掘られたものではなく、道路の幅を示すかのごとく断続的に、きれぎれに検出された。この検出された溝は、その形状・大きさ・埋没土の観察により4条の溝は東西の2条が単位となり道路幅を示していることが明らかとなった。そして、時間的に4時期にわたって築造・修復したことが把握されたのである。この道路跡が「東山道武蔵路」とすれば、上限7世紀後半、下限9世紀後半にかけて確実に使用された「公」の道路―官道が4次にわたって手を加えられていたことが知られたのである。さらに注目すべきは、調査区の北寄りの東側溝に接して見い出された土坑中から10世紀中頃の須恵器の坏と壺が出土したことである。道路との直接的関係については検討中であるが、道路使用時の状況を示すものとして意味は大きい。

縄文時代の遺構としては、中期阿玉台式土器を伴う竪穴住居跡1軒と集石遺構数箇所、そして多数の陥し穴を含む土坑が検出された。かなり広い範囲を発掘したにもかかわらず、集落としての形をとることなく住居と集石と土坑が検出されたことは、発掘地域の生産活動を考えると、付近地の集落との相関関係を考慮しないわけにはいかない。とくに、その時期が中期の阿玉台式土器の時代であり、該式文化の拡散と定着を検討する際に好資料となるであろう。

旧石器時代の関係では、Ⅲ層とⅢ層直下、そしてX層から石器・剥片が出土した。Ⅲ層は尖頭器を主とするものであり、X層出土の剥片はグリーンタフのものである。このような石器時代についての発掘結果は、西方に位置している武蔵台遺跡の様相とあわせ検討すべき資料の検出となったのである。

尚、古代については、別冊『推定東山道武蔵路』（平成8年5月刊）を参照願いたい。

(坂詰秀一)

西 國 分 寺 地 区 遺 跡 調 査 会 組 織 名 簿

会 長	柴崎 正次	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副参事
副 会 長	岡村 豊	国分寺市教育委員会文化財課長
理 事	坂詰 秀一	東京都文化財保護審議会委員 (立正大学教授)
	永峯 光一	東京都文化財保護審議会委員 (國學院大學教授)
	藤間 恭助	国分寺市文化財保護審議会委員長
	清水 文夫	東京都住宅局建設部大規模団地対策室長
	林部 和幸	東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
	永田 晃	住都都市整備公団東京支社住宅事業第一部企画用地課長
	吉永 文夫	国分寺市開発第二部事業推進課長
監 事	本藤 圭孝	東京都住宅局建設部推進課開発係長
	佐々木徳明	国分寺市開発第二部開発業務課長

事 務 局

事務局 長	和田 利昭	調査会職員
事務局 員	夏目みね子	調査会職員

調 査 団

団 長	坂詰 秀一	立正大学教授
副 団 長	持田 友宏	日本考古学協会会員
顧 問	永峯 光一	國學院大學教授
顧 問	吉田 格	国分寺市遺跡調査会団長
参 与	早川 泉	東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
調査指導員	上村 昌男	国分寺市教育委員会文化財課職員
主任調査員	板野 晋鏡	調査会職員
調 査 員	伊藤 俊治	調査会職員
調 査 員	小林 定之	調査会職員
調 査 員	月村 桂子	調査会職員
調査補助員	円谷 猛	調査会職員
調査補助員	田口 直美	調査会職員
整理作業員	司東 順香	調査会職員
整理作業員	中野 宏子	調査会職員

(平成8年4月現在)

(発掘参加者)

秋田裕子 雨宮武富 新井治美 磯部太平 岩本重規 稲垣 浩 飯島明美 井上善幸 伊藤貴之 井上富裕
 岩田輝穂 岩瀬 剛 伊藤信男 飯塚敏男 池田盛人 岩本広海 石坂誠一 石懸隆行 猪瀬 要 飯島博文
 石川 享 石田 学 磯村 陽 宇佐美貴香 上淡辰彦 上原正次 梅田義光 白井 慶 宇田川 肇 牛田
 裕一 遠藤清登 江原晶子 江都明男 江原 健 太田昌興 大井 史 近江幸子 小川隆章 小田倉麻衣子
 大関敦子 岡本和久 奥村一正 小田切広一 小山猛志 大泉谷裕 大谷清子 岡田みどり 大谷 敏 大釜
 啓滋 小野寺俊昭 乙葉 澤 川上 啓 加藤さやか 金子雅明 河原崎理佳 加納知美 川上純二 川野真
 介 金子清美 金子昭仁 川津佐知子 風間佐智子 加藤隆一 川口順司 鎌田裕子 木村久子 木島雄三
 佐藤洋介 下山和實 志賀正典 白須早苗 志田貴之 渋谷滋郎 新海由利枝 白石なつめ 白坂昌幸 清水
 尚子 島田俊明 上嶋めぐみ 嶋津康孝 須賀きみ子 鈴木惠子 鈴木賢次郎 鈴木淳之 鈴木雅人 関口良
 平 曾根隆俊 高橋昌広 高橋慎太郎 滝澤謙一郎 千田 淳 塚田達也 土田方正 土屋千年 寺原千恵子
 寺井重雄 手塚勝之 外山浩二 得能良介 渡具知善史 利根川典江 富田静香 徳永史世子 鳥羽弘子 富
 樫啓弥 富永幸司 長崎 稔 内藤博隆 中川洋美 中村直明 永福宏史 中野淳一 永井奈緒美 中野季美
 江 中島信彦 中村浩司 中村二郎 中村修一 西田明子 西本義樹 新村幸成 野田定男 野本達夫 橋本
 光弘 橋本なぎさ 福垣内浩二 弘永真一 平賀義則 肥田博貴 引地隆一 樋口晋一 古屋真司 藤森賢治
 福垣内浩二 藤井茂男 富子太郎 藤井利勝 本多 実 堀部祐紀子 本田 康 松永真澄 松本京子 松清
 博 前田博行 松井一夫 増田 英 前田 仁 満窪篤敏 水越和也 三島丈英 宮嶋英樹 宮城聡子 村木
 眞弓 村上美由紀 向山正明 森 良子 門垣友也 諸沢白夜香 山腰淳一 山本英司 矢野悦子 山陰みど
 り 山川昭正 山口真人 山本和一郎 山崎 達 山崎千絵 山田真珠美 山崎利雄 八藤後和浩 山川一郎
 山本芳江 安井春雄 吉澤賢豪 吉本敏夫 米光輝一 横沢 晃 吉沢啓子 渡辺昌子

報告書抄録

ふりがな	むさしこくふんじあとほくせいちくのいせき						
書名	武蔵国分寺跡北西地区の遺跡						
副書名	西国分寺地区(旧国鉄中央線鉄道学園西側跡地)住宅市街地総合整備事業に伴う平成7年度発掘調査概報						
編者名	栗崎正次・取捨秀一・持田文宏・板野晋鏡・伊藤俊治・小林定之						
編集機関	西国分寺地区遺跡調査会						
所在地	〒185 東京都国分寺市泉町2丁目1番地 TEL 0423 (26) 1767						
発行年月日	1996年5月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村/遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
むさしこくふんじ 武蔵国分寺 あとほくせいちく 跡北西地区	ちゅうごく 東京都 こくふんじ 国分寺市 いづみち 泉町2-1	13214 No.19	35°41'08"	139°28'04"	平成7年4月1日 — 平成8年3月31日	35,950.28㎡	西国分寺地区 住宅市街地総合 整備事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
むさしこくふんじ 武蔵国分寺 あとほくせいちく 跡北西地区	集落跡	奈良平安時代	道路状遺構 土坑 溝跡	須恵器 土師器	古代推定東山道武蔵路跡		
		縄文時代	竈穴住居跡 集石跡 土坑	縄文土器 石器	中期前半の住居跡 隔し穴		
		旧石器時代		尖頭器 ナイフ形石器			

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡

西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）

住宅市街地整備促進事業に伴う

平成7年度発掘調査概報

発行日 平成8年5月10日

編集 西国分寺地区遺跡調査団

発行 西国分寺地区遺跡調査会

東京都国分寺市泉町2丁目1番地

☎ 0423-25-1767

印刷 明誠企画株式会社
